

金山鐔の製作時代と小ぶりの理由

「松皮菱透」鐔

伊藤 三平

今回は標記の金山鐔を例に、金山鐔が小ぶりの理由、製作時代などを各種資料から考察し、この鐔の松皮菱文様からは絵画資料も検討して、論を補強してみたい。

1. 金山鐔の代表作の1枚

この鐔は耳に塊状鉄骨だけでなく粒状鉄骨も出ており、法量は縦72・9ミリ、横71・1ミリ、厚さは耳で7ミリ、切羽台で6ミリである。同図柄で、同作者（工房）と推測される鐔が『刀装・小道具講座 1 鐔工編』（若山泡沫著）の「金山鐔」項に図版で紹介されている。また野田喜代重氏（江戸期から続く刀剣商「網屋」で奉公した刀装具の目利き）が刀剣誌「大素人」6号に連載したコラム「刀・小道具と共に（六）」に、明治の鉄鐔研究の第一人者秋山久作先生御愛蔵品として、同作

が、秋山氏自身の箱書と共に所載されている。箱書は難読であるが、「金山鐔の世に残存する物で、二つと無き良品と認むるものは稀なり。余、幸いにして是を得る」というようなことが記されていることからわかるように、金山鐔の代表作の1枚である。



2. 金山鐔に対する古文献『金工鐔寄』の評と『好色一代男』

金山鐔という分類名称は、元禄頃の『彫物目利彩金称』に「金山鐔 いづれも古し」を始めとして、『刀盤賞鑒口訣』（18世紀後半に活躍した松宮観山著）などに取り上げられていることが『透鐔』（笹野大行著）に誌されている。具体的な作風、製作時代等の記述は『金工鐔寄』（田中一賀著、天保10（1839）年）に詳しく、次のように記されている。

「金山は山城国、地名なるか姓なるか知らずと言えども、世に唱えて珍重す。中略―大透武用には悪かるべし。天正頃、世治まりて後の作か。錆味数百年にも及ぶ如く見ゆ、町人好んで用ふ」（表記は現代仮名遣いに変更）この評の為に、小型の鐔で、透文様が大きいから武用には適さず、町人好みであると誤解している人も多い。

この田中一賀の一節「町人好んで用ふ」は、井原西鶴の『好色一代男』（天和2（1682）年刊）の巻七の「末社らく遊び」（無礼講のような遊び）の章に、当時の贅を尽くした大尽の衣装・小物が紹介されていて、そこに次のように記されていることに影響されていると考えられる。

「町人こしらえ七所の大脇指、すこし反して、あい絞を懸け、鉄の古鐔ちいさく、柄長く、金の四目貫うつて、鼠屋が藤色の糸」（『決定版対訳西鶴全集二』より）。現代語訳は「町人好みの七所拵（縁、柄頭、目貫、折金、栗形、裏瓦、笄を揃いの図柄で造ったもの）の大脇指（二尺八寸程度）を少し反らして差し、藍の絞皮を鞘にかけ、鉄の小さい古鐔をつけて柄は長くして、金の四目貫（柄の両側に目貫を二つずつ打ったもの）を用いる。それに鼠屋製（京都の有名な組糸屋）の藤色の下げ緒を附けている」となる。『好色一代男全註釈』（前田金五郎著）に「鐔の小さいのは延宝末当時の流行」と註釈されている。

なお『日本刀大百科事典』（福永酔剣著）に「七所拵え」の項があり、「寛文頃には小型の鉄鐔が流行で、元禄頃には鉄の古鐔が大型になる」と説

明されている。

江戸期の町人は正装時には脇差だけを佩用したが、大金持ちでなくとも「古鐔小さい」のは買いやすかったと思われる。しかし古鐔の数には限りがあるから、この時期に新作として製作されたものも多く存在すると考えられる。

3. 小ぶりの鐔が生まれ、流行した背景

金山鐔の特色の一つである小ぶりの鐔であるが、常識的には短い刀（脇差）用と考えられる。

△室町時代▽

室町時代前期には応永備前のように平造り短刀の寸が延びた脇差が出現し、後期にかけて片手打ち用の2尺前後の打刀（1尺8寸程度から2尺1寸程度まで）が出回る。すなわち、この時期に小ぶりの金山鐔は製造された可能性はある。

△安土桃山時代から江戸時代初期▽

戦乱が一段落すると、傾き者と称される荒くれ男が、大仰な大刀に大鐔、大角鐔をつけて闊歩するが、一方で女歌舞伎が生まれ、彼女達は細身の刀に小鐔で踊る。このファッションを真似る男もいたと考えられる。流行、ファッションに深い理由は無い。

（図：東京国立博物館蔵「花下遊楽図屏風」から抜粋。

『もっと知りたい 狩野永徳と京狩野』（成澤勝嗣著）より



△江戸時代前期 寛文～元禄期▽

前述した『好色一代男』の記述にあるように、お大尽の町人の脇差に「鉄の古鏢ちひさく」が流行している。このファッションは当然にお金持ちではない町人にも広がったと考えられる。

また正保2（1645）年に大小刀の寸法規制が出され、武士の脇差も1尺8寸までとされ、脇差需要が増加し、寛文新刀の名工に脇差の名品も多く見られるようになる。それに連れて武士においても小鐔需要が増加したと考えられる。

4. 松皮菱紋の出現と「松皮取り」の流行

「刀和」403号（令和6年3月）で「桐・三階菱透鐔」を取り上げ、その三階菱の紋所から阿波三好氏が京畿に覇を唱えた時期に関係者からの注文で製作されたのではと推論した。

この松皮菱も菱紋の一種で、『日本紋章学』（沼田頼輔著）には鎌倉時代の守護小笠原氏に因む紋として阿波の全豪族中では三階菱か松皮菱が三分の一を占めると記されており、同様な推論が可能だが、松皮菱紋は寛文時代頃まで広く愛好された文様であり、幅広い視点から論じてみたい。

(1) 後藤乗真の小柄「松皮菱文」図

以下の小柄（後藤乗真作 廉乗極め。『刀装金工 後藤家十七代』より）は極銘であるが、廉乗と言う古い時代の極めであり、信頼性は高い。後藤乗真は永正9（1512）年～永禄5（1562）年の生涯である。製作は若年時を除き、天文（1532～1554）、弘治（1555～1557）から逝去する永禄5年まで（1558～1562）が中心と考えられる。

三好長慶（紋は三階菱に釘抜き）の絶頂期は天文19（1550）年～永禄4（1561）年であり、後藤乗真の活躍時代に合致する。この小柄も三好家に属する松皮菱紋を家紋とする阿波の武將の注文とも考えられる。

(2) 丹羽長秀の軍旗に「松皮菱に笹」

賤ヶ岳の戦い（天正11（1583）年）を描いた「賤ヶ岳合戦屏風」（『戦国合戦絵屏風図集成 第2巻 賤ヶ岳合戦図・小牧長久手合戦図』より）がある。絵は江戸時代に画かれたもので、



『太閤記』、『信長記』、『諸將旗』らの記述に合わせて画いている面もあるが、武士の装束や旗、馬印などは当時の風俗を正確に描いていると言われている。

秀吉本陣部分を抜き出したものだが、虎の皮の陣羽織を着て「赤地に金の日の丸扇」を持っている。



るのが秀吉である。そして秀吉の斜め左下で黒い兜に緋緘の鎧、クジヤク羽根の陣羽織を着たのが丹羽長秀である。そこに長秀の軍旗の「白地に松皮菱に笹」の旗が翻っている。なお丹羽長秀の馬印（戦場で武將が己の存在を明示するもの）は斜め左下の従者が持っている「絵鶴竹に金の短冊」（黒い羽根が左右に5つあるもの）で、長秀の家紋は×のような直違紋である。

(3) 「松皮取り」の流行―辻が花染めの衣服

「松皮取り」とは松皮菱紋の陰透かし文様の中に他の模様を入れることである。これが安土桃山時代を中心に流行している（『日本・中国の文様事典』視覚デザイン研究所編より）。ちなみに「松皮取り」のような枠取り文様には「洲浜取り」、「霞取り」、「鳥取り」などがあり、「扇面」、「円」の中にも図柄があるものもある。



室町時代から桃山時代にかけて流行した色も多色に染め分けた文様染めの「辻が花染め」にも「松皮取り」の文様がいくつか見られる。

（「松皮取りに草花扇面散らし文様裂」、『日本の染織2 辻が花』（河上繁樹著）より）

(4) 織部焼に「松皮取り」

桃山期の茶人・古田織部の好みで作られたという焼き物が織部焼だが、ここにも写真の作品のように、松皮菱は器の形状に取り入れられている。

（「鳴海織部 松皮菱形手鉢」北村美術館蔵、『日本陶磁大系12織部』より）

(5) 赤坂鐺の四方松皮菱透鐺

赤坂鐺の初二代の作と考えられる鐺にも、松皮菱を洗練されたデザインで透かした鐺が存在する。赤坂鐺の伝承では雁金屋彦兵衛と忠正兄弟は寛永年間（1624～1643）に京都から江戸に出たと伝わっている。



まとめ

現存する金山鐔と分類されるものを観ていくと、天保期の田中一賀が鋳味数百年と観たような古いものもあるし、江戸時代前期と思えるものもある。すなわち「室町時代末期」、「慶長期」、「寛文期」があるのではなからうか。

「刀和」393号で福島正則の軍旗「山道文」の意匠ではないかと発表した鐔も金山鐔と分類される範疇はんちゆうのものである。私の所蔵する「松皮菱文透鐔」は古い時代のもものとされる粒状鉄骨はあるが、デザイン・造り込みは洗練されており、慶長時代に造られたものではなからうか。そして製鐔の地は古書にある山城（伏見も含めて）ではなからうかと考えている。

